

ルイス・キャロルの『ロマンスメント』

笠井 勝子

ルイス・キャロルが1856年に発表した、*Novelty and Romancement*は、意表をつく結末の部分がよく解説されてきた。甘いロマンスと詩の世界に身を捧げようとする主人公が、ふと散歩の途中でみつけた、とある入り口にぶらさがっている一枚の看板、彼ならではの目の錯覚が、主人公を憧れの世界到来と有頂天にさせる。翌日もう一度、今度は証人を頼んで、一緒に出かけてもらい、震えおののきつつ、来てみれば...というのが、結末への筋書である。この山場へ到達するまでに、話を盛り上げる脇道の雑談がいくつも積み重なっている。しかしクライマックスへ来ると、その後は、締めくくりのひとつこと‘Nevermore’へと急ぎ、ストーリーは畳み込まれる。すなわち、それまで話題になっていたある人物を証人として頼み、同行させているのだが、悲劇に転落した主人公の描写に忙しい作者は、すっかり同行者の存在を忘れてしまっている。

作品のタイトルは、*Novelty and Romancement*——*Broken Spell* by Lewis Carroll『新奇とロマンスメント』副題を「破れた呪文」という。

雑誌Trainに発表した*Novelty and Romancement*は、1925年になってRandolph Edgarが序文を書き、アメリカのB. J. Brimmer社から出版された。この版は、Edgarの序文が6頁、キャロルの本文は35頁という小さなハードカバーの一冊本として出版された。

1856年という年は、キャロルの創作発表を通してみると、感傷型、理想の賛歌、独創的自由奔放型、という三つのタイプのいかにも青年らし

い作品を世に送った年であった。3月には、3年前に書いた『孤独』という詩を発表している。『孤独』は最後の「みなことごとく差し出そう／積もる歲月のもたらず富を／朽ちゆく人生の結実を／輝く夏の一日／幼子に戻れるなら」という1聯によって、あたかも晩年に書かれたように思わせる詩であるが、これは21才のキャロルが、青年にありがちな、甘い憂鬱に浸ってひとりもの思う情景を謳いあげたものである。続いて出した『薔薇の道』は、決然と夢を実現させたフローレンス・ナイチンゲールへの賛歌であった。さらに秋には、青年の夢想と理想を包みこみ弁論調で織りなすことばの誇大構築物、*Novelty and Romancement* を発表した。『孤独』を感傷型、『薔薇の道』を理想の賛歌と呼べば、*Novelty and Romancement* は自由奔放抱腹絶倒型といえよう。

『孤独』は、1862年発表の *Stolen Waters* という作品と、同系列に入る。*Stolen Waters* は、旧訳聖書の箴言9章17節に由来する題名で、邦訳は『盗んだ果実』あるいは『人目を忍んだ快樂』という。『孤独』の詩と同様に、青年に特有の感傷をうたっている。『薔薇の道』は、ホルマン・ハントの絵に啓発されて夢に見た *After Three days* 『三日後』という詩（1861年）と並ぶ。そして、荒削りなところがあるものの、*Novelty and Romancement* は、『ハイアワサの写真術』をはじめとする誇大な表現で、笑いを生み出すキャロルらしい作品群と同じ系列に入る。

これらの三作品が『トレイン』に載った1856年という年は、キャロルが1851年に大学に入ってから、55年にリデルによって数学の講師に任命された。その翌年に『孤独』、『薔薇の道』それに『ロマンスメント』を発表している。ひとりで自活できる見通しが立ち、いよいよこれから自分の人生が始まるという、前途洋々24才の春であった。Studentshipの条件さえ満たしていれば、彼は生涯をクライスト・チャーチ学寮で暮らすことができる。何の愁いもなく、未来は保証されていた。

1869年に出た『ファンタズマゴリア』は、雑誌『トレイン』に掲載したキャロルの作品をほとんど収録しているが、例外が、二つある。一つは、ワーズワースの*Resolution and Independence*のパロディである*Upon the Lonely Moor*、もう一つは、ここで取り上げる*Novelty and Romancement*である。*Upon the Lonely Moor*は、『ファンタズマゴリア』から、3年後に出版される『鏡の国のアリス』の中で書き換えて、*The Aged, Aged Man*という詩になった。そのために、『ファンタズマゴリア』からは、はずしておいたのだ、と思われる。一方、*Novelty and Romancement*の方は、短編であるから、詩集『ファンタズマゴリア』には集録していない。

ランドルフ・エドガーによれば、この短編は、『トレイン』に掲載されて以後、70年間どこにも再録をされなかった。ここに1925年の版によって、『ロマンスメント』を紹介しよう。書き出しは主人公「私」の自己紹介で始まっている。

「私は人生のあの時を“阿鼻叫喚”というべきか“勝利の声”と称すべきか、迷っている。

そこには、偉大と威光があり、厳粛と厳格がある。二つの間の半ばというものを探し、ついに上記の表題を定めた。これももちろん間違っている、私は常に間違っている。だが、今それをいうのは、止そう。真の雄弁家なるものは、初めから、激情に身を任せることはしないものである。先ずは、ありきたりのことで語り出し、徐々に調子を上げていき、進行とともにその力を増していくのである。先ずは、名乗ることにしよう。私は、リオポルド・エドガー¹⁾・スタッブズ、という者である。ここで、はっきりと断わっておく。読者諸氏がこの名前と同名の他の人物と混同を起すことのないように願いたい。キャンパーウェルのポトル通りに住む有名な靴屋とか、有

名とはいかないがもっと広く世間に知られた名前、カナダの軽い喜劇役者のスタッフズとか、どちらの連想も恐ろしく、軽蔑を持って願ひ下げだ。ただ、ここに挙げた個人に対して中傷の意図はまったくない。これまで会ったことがない人たちであり、将来も会うことがないよう願っている。

さて、ありきたりのことはこれくらいでよい。」

この後、「私」は、夢や予兆を説き明かす者に呼びかけて、ある金曜日の午後起きた偶然のできごとを語り、不思議がる。その金曜日の午後「私」はグレイト・ウォトルズ・ストリートを出た所で突然、ひとりの男とぶつかりそうになる。この男との出会いの一瞬に生じた内面描写が——出会いは24頁目で語られて、そこから自分の内なる描写へ移り、再び男との出会いの瞬間に話が戻ってくる33頁目まで、「私」の話は脇へ脇へと9頁分流れて続く。次は「私」が運命的な出会い、と思い込んだ男の外見の描写である。

「出会った男の外見は目立たず質素な身なりである、しかし、その目ときたら天才の炎が燃え立っていた。夜になって、わが人生の素晴らしき理想が叶えられようとしていることを、夢にみた。我が人生の素晴らしき理想とは何か。お話ししよう。恥と悲しみをもって、お話ししよう。」

そして、幼い頃から胸に抱いた詩への憧れは、突き詰めていえば「ロマンスメント」への憧憬であった、と語る。

「子どもの頃から、私の乾きと情熱は（独楽回しの紐に対するよりも、タフィー飴とは互角の勝負で）、詩歌に向かっていた。最も広い意味

と最も激しい意味での詩歌、意味や韻やあるいはリズムの法則に拘束されず、宇宙の音楽に共鳴している、そのような詩を求めた。小さい頃から、いやゆりかごの時代から私は詩に憧れ、美に、斬新に、ロマンスメントに憧れた。「憧れ」というが、それは私の静かな時の気分を表わすことばであり、それはまた身を投げて飛び込むような激的な情熱をも指すものである。(それを別のことばでたとえれば) アデルフィ劇場の外壁を飾っている非解剖学的看板が、およそ人間の骨格がこれまで取ることはできなかつた姿勢にフレックスモア²⁾を描いて、最低料金で芝居見物をする思索好きの連中に、人間の姿と造形ゴムの双方が合い醸し出すとてつもない優れた所業で、真の意味を伝えている、といったところである。」

「やや、問題がそれってしまった、それも人生だから、ありがちのことである。」

と言って、ここで、本論に戻るかと思えば、次には、「人生とは、何か」をたずねてみようとする。

「私は、ある時、「人生とは、結局、何ぞ？」について語っていた。それについてはもっと詳しく書き留める時間がないし、またその時に居合わせた者の誰ひとり、(私たちは、ウエイターも含めて、全部で9名であった。そこで、私がそのような考察を披露したのは、スーヴが下げられている間のことであつたのだが)、私に論理的な回答を与えることのできる者は、そこにはおらなかつた。

そこで「私」の思考は再び、詩歌に戻って、幼い頃から詩作を激励してくれたおじのことに話が及んでいく。

「人生も初めの、幼い頃に書いた詩は伝統的紋切り型から離れて全く自由自在であるところが実に際だっていた。それだからこそ、今日の文学が厳格に要求するところに沿わないものでもあった。未来の時代には、その詩が読まれ絶賛を受けるであろう。そして、「ミルトンが、」と我が尊いおじがよく、声を上げて言ったとうりになるだろう、「ミルトンやその類の詩人が忘れられるようになった時こそ！」

19世紀半ばのこの時に、ミルトンが忘れられるときがくるとは誰も予測をしていない、のであった。そして、20世紀の終わりの今、ミルトンよりもはるかに、このユーモアを残してくれた作者の名は世界に知れ渡っていることを、この時「私」は、少しも驚いていなかった。「私」に対するおじの鼓舞激励の一例は次のようなものであった。

「この共感してくれるわが身内がなかりせば、我が天性の詩情は決して出現することはなかったものと確信する。今でもよく覚えている。おじが「独裁君主制」に寄せる詩を書けば6ペンス上げよう、とこどもの私に言ったときのあのぞくぞくする気分。その詩を探し出すことに成功してはいないのだが、ちょうどその次の水曜日のこと、みながよく知っている、私の『死せる子猫に寄せるソネット』を書き綴ったのだ。それからの2週間で3つの叙事詩を書き始めた。題名は残念ながら覚えていない。」

さらに、世間に受け入れられない詩人たる「私」の真価について、次のように語っている。

「私は生涯の間に7巻の詩を恩知らずの世間に送り出した。それはみな非凡な才能が受ける、無名にして侮りを被る運命をたどった。そ

の中味に何か欠点があった、ということではない。欠点がいかなるものであったにしろ、いづれの書評欄も批評を試みることを、未だしていないのだ。これは、大いなる事実である。私の作品で、世間で何らの噂になったものは、マグルトン・カム・スィルサイドの支持団体に寄せた一編のソネットであり、彼がその町の市長に選任された時のことであった。その詩は個人の手から手に、広く回覧せられ、当時は大いに話題になった。主題については、大衆固有の精神のゆえに、詩の中の繊細な賛辞を評価し得ることを果たしていない。それどころか不遜なことばでその詩について語ったのだ。しかし、私は今、その詩があらゆる偉大なるものをもつと考えたい。結末のカプレットは友人の勧めで付け加えた。友人は詩の意味を完結させるために必要だ、という。この点について私は、彼の円熟した判断力に従った。」

この後に14行詩が続いている。そして、英国の詩人の最高の名誉である桂冠詩人の選任について、以下のように特異な提案をしている。

「アルフレッド・テニスンは桂冠詩人である。その栄誉ある地位に彼が就く権利を請求することを云々する者ではないが、もしも政府がその時に遠慮なく介入さえしていれば、そしてその地位を広く競争で決めることと定めて、候補者の力を試すためにしかるべき課題——例えば、「フランプトンの健康丸薬、アクロスティック詩」という課題——でも出していれば、結果は非常に異なっていたであろう。

もちろん、そのような課題で桂冠詩人の地位を競っていたら、アクロスティック詩を得意とする「私」の作者はテニスンと入れ替わっていたのにちがいない。

「だが、本題に戻ろう（これを、わが高貴なる同朋は、実に非ロマンチックに「マトンに戻ろう」というのだ）、そしてグレイト・ウォトルズストリートの職人に。

ここは、‘return to our muttons’ 本論に話を戻す、という英語の慣用表現の意味と字句どうりの意味との二重の意味に使ってあそんでいる。

「職人は小さな店から出てくるところだった。不細工な作りの店で、ずいぶんと崩れかかっており、全体に少し怪しく見えた——こうしたすべての中に一体何を見たから、私の存在にとって偉大なる人生の記念すべき事件が到来したと信じたのか。読者よ、私は看板を見たのだ！」

偉大なる人生の記念すべきできごと、と緊張感を張り詰めておいて、「看板」というひとことを放り出すので、聞くものはみな、ガシャッとたがを外されてしまう。

「そうだ。あの錆び付いた看板、片方の蝶番で崩れかけた壁についてきしんだ音を立てていた看板の上に書いてある文字が、頭から足先まで滅多にはない興奮で私をぞくぞくとさせた。『サイモン・ラブキン ローロマンスメント商』。これがそのままのことばである。

こうして話は冒頭の語り出しへ戻っていく。

「ときは、6月4日、金曜日、午後四時半のことであった。

三度私はその文字を読み直した。それから手帳を取り出して、その場で写しとった。職人は一部始終を真剣、かつ（その時はそう思え

たのだが) 敬意をこめた驚きでじっと見つめていた。

私は職人を呼び止めて、言葉を交すことにした。その時以来、長年にわたる苦悩は私の悶える胸にあの場面をじわじわと焼き付けて消えない。私は交したことのひとつひとつをすべて、繰り返すことができる。」

思い込みによって、「私」と何もわからない職人との間には行き違いの会話が続き、読者に期待と予感を抱かせる。

「職人は、」(と「私」は最初の質問をした) 同類の気質をお持ちか、否か？」

職人は、わからない、と事実のままを告げた。

「お気づきであろうか (ここで思い入れの強調をして) 彼の看板の上にかかれた輝かしい文字の意味に。」

素晴らしいではないか、職人は以前からそれについて悉く知っていた。

「では、職人は (突然の招待だとはいえ) 近隣のパブへ席を移し、ここでゆっくりこの問題を話し合うことに異論がありますでしょうか？」

職人は一杯やることに異は唱えませんが、それどころか、喜んで、と言った。

(そこで、休憩にはいり、水割りのブランデーを2杯。そして会話は続行した。)

「その商品は売れるのか、特に「民衆」にはどうなのか。」

職人は哀れみを浮かべた善良な目で質問者を見た。「商品はよく売れる」と彼は言った、特に民衆がよく買っていく、と。

「どうしてあそこに「斬新」と付けないのか？」(これは、重大な瞬間で、私は聞きながら身体が震えた。)

「悪くない」と職人は考えた。時がきた、時が答えることだろう、し

かし時は飛び去るのだ、そうだね？

「この輝かしい事業において、職人はおひとりか、それともその商品と同じように手広く扱っている方は他におられるのか。」

職人は叩きつけるように言った、「誰もおらぬ。」

「この商品は何のために使用されるのか？（この問いを私は興奮で息を詰まらせながら口にした。）

「それは、たいいてい何でも一緒につなぎ合わせる」と職人は信じていた、そうして石よりも硬く固める、と。

これは解釈するのに困難な一文であった。

私はしばらく考えてみて、それから、自信はもてないが聞いて見た、「君の言っていることは、それが人間の運命の切れた意図縦糸を結ぶのに役立つと言っているのかい。

豊かな想像力の生み出した非現実的産物に、生き生きとした現実性をいわば付与する、ということだろうね？

職人の返事は短く、しかも味気ない言葉であった。「そういうことでがしょうかい——俺ら、学者でねえっち」

これで、会話はまぎれもなく失速した。長年大切にしてきた夢が叶ったのであろうかと、胸の内では真剣に議論が渦巻いた。このような場面は、私が思い描いたロマンスとは実に不調和であった。また、目の前の友には私の中の激烈な興奮にも一向に共感するようなところがないことも、痛切に感じられた。私の興奮は無遠慮な輩がただ奇抜と片付ける行動の中に、これまでそのはけ口を見い出してきた。」

ここで再び、「私」は職人との会話から離れて、夢に思い描くロマンスを求めて行動を起こしたときの自分の姿を語り始める。

「或る時私は雲雀と共に起き——あの鳥は「一日の可愛い先触れ」——

(確かに一度。二度はなかったが)特許の目覚まし装置の助けをかりて、時ならぬ時間に出かけて行ったことがある。玄関の石だたみを磨いていた女中をひどく驚かせて、露の置く芝生の水滴を踏み払いつつ、半ばは眠りに閉じた目で、金色の曙光を目撃したことがある。友にはいつも話してきたが、このことについて語る時、その瞬間の私の恍惚ときたら、あのような興奮に身を晒すという危険はあれ以来、もう二度とおかそうとは思わない程、過激なものであった。

そうしたロマンスへの思い入れにも、実は思いのほか興醒めな現実がついてまわる。

「これは、内密の話だが、私が一晩でなしとげた理想に、現実には及ばなかった。従って、それほど無理をして早起きする苦勞には見合わない、ということだ。

私はまた別のとき、夜中に、厳肅な森を彷徨い歩いたことがある。苔むした泉の上に身を屈めて、水晶の流れにもつれた髪と熱い額を浸した。

(たとえ、その結果がひどい風邪で寝込んでしまったり、髪のカールが一週間もかからなかったところで、何だというのだ。こうした些細なことをもって、その時の詩情が台なしになるだろうか。)

或ときは小説を地でいってみようと、物好きなことをやった「私」に、また現実的な酬いがあった。尊敬するおじは、そのときですら、少しも騒がず「私」を励ましてくれるのであった。

「私はセント・ジョーンズ・ウッドの近隣にある、自分の小さいが綺麗に整えた住みかを解放して、ひとりの老いた乞食を、「私の炉端に座り、夜を徹して語り明かそう」と招き入れた。(それはゴールドスマスの『見捨てられた村』を読んだ直後のことだった。確かに、彼

は何一つ面白いことを話さなかったし、また夜が明けて出て行ったときに広間の大時計を持って行ってしまったのは事実であるが、それでも、おじはいつも、「自分もそこに一緒に居たらよかったと言ってくれた」。また、このことで、私の内にある新鮮さやイマジネーション（というか「気質」というか、そのどちらだったか忘れたが）おじには予想外のものだった未熟さが見えた、と言うのだった。

話は移って、世間に未だ認められない尊敬する「おじ」の持つ哲学的才能に及ぶ。

「この後者の話題についてもっと詳しく語ることは私の務めであると思う——私のおじの履歴のことだ。いつの日かあの素晴らしい男の才能を世間が崇拝するようになる日がこよう。資金が無いので今のところは彼が考案した哲学の偉大なる体系を公刊することができないが。そこで今は、かれが恩知らずの国家に残す貴重な多数の手書き原稿の中から、際立った一例を選んでみよう。そして、私の詩が広く世間で高い評価を得る日がきたら（今は遠い先のことに見えようとも！）そのときには、おじの非凡な才能も当然の榮譽を受けることになる、確信している。

ここで、「私」は、非凡な「おじ」の一文を引用して、「哲学的解釈」を試みる。その終わりの方には、ソクラテス、プラトンの名前を担ぎ出した。

「尊敬する親戚の書き物の中に彼の時代のある哲学の本からとった一頁とおぼしいものがあつた。それには次のことが記してあつた。「これはあなたの薔薇ですか？それは私のものです。それはあなたのも

のです。これらはあなたの家ですか？それらはわたしのものです。私にパンを（少し）ください。彼女は彼の頬を平手打ちした。」これについておじの手で傍注が付けてあった。「或ものはこれをばらばらの文という。わたしには、別の見方がある。」この最後の一言は彼の好きなことばで、倫理的深い慧眼を隠しているのです、それが何かは考えても無駄であろう。真に、この偉大なる男のことばはいつもきままって素朴であるため、私を措いては他に誰もおじがふつうの人間以上の思弁能力を持つとは思ってもみないのであった。

僭越ながら、ここで卓越したこの一文についておじが解釈したであろうと思われることを披露させていただきたい。著者は詩と物的財産と個人の所有物の領域を区別する意図と見受けられる。質問者はまず、花のことに触れている、それに対して何たる気前のよい感情のほとばしりか！「それは、私のもの。それはあなたのもの。」それは美しいもの、真のもの、善なるもの。そのことばは自他の所有権を主張するけちな了見に煩わされていない。自他の所有物も、人間共通の財産である。（そのような理念に基づいて「私」は一度有名な法案を作成したことがあった。その名称は、「美を根拠として狩猟法の実施からキジを免除する法令」であった。この法案は間違いなく両院を成功の内に通過したはずであったのだが、その手続きを引き受けてくれた議員が、不幸にして精神病院に入れられて、第二読会には進まなかった。）

第一の質問が成功したことに勇気を得て、われらが質問者は「家」（「物的財産」であることがおわかりでしょう）へと話を移す。ここで、彼は厳しい、寒気のする答え「それらは私のもの」——に出会う——これにはそれまでの答えが持っていた、いかなる鷹揚な気持ちの片鱗もなく、代わって所有の権利を厳然と主張している。

「これが、純粋にソクラテスの対話であれば、しかも単に現代の模倣模造版でなければ、質問者はおそらく、次のようなことばを差し挟まれたことだろう、「私にですよ」とか、「私です、私としてはね」とか、他に一体どうするのだ?」とか、その他、同じような独特の表現を。それはプラトンが登場人物にすぐさま司会者の意見を盲従的に受け入れさせ、彼等の使うことばが文法違反していることを明かすのに似ている。

「大胆な質問者は最後の回答の冷淡さにひるみもせずに、質問を要求へと変えていく。「私にパンを与えよ」と。ここで、会話は突然停止する。そして、以上のことの教訓は話の中に指摘されている。すなわち、「彼女は彼の頬に平手打ちをくらわせた」と。これは、一個人、あるいは一国家の世界観にあらず。その感情は、もしこう言ってよければ、ヨーロッパ的問題である。私のこの説は、その本が英語、フランス語、ドイツ語の並記で印刷してある、という事実からも裏付けられよう。」

こうして、「おじ」の紹介を終えて再び、職人との会話の場面に戻り、「おじ」の立ち会いの下に、職人が商っている「ロマンスメント」を確認することになる。

「おじはこのような人物であった。その人物と共に、私は疑わしい職人と対決をする決意を固めた。「翌朝面会の約束をした。そこで私は「その品物」（とてもその大切なことばを口にするなど私にはできない）を実地に調らべよう。その夜は眠れぬ興奮した一夜で、やがてくる決定的瞬間の予感に押しつぶされそうであった。」

その決定的瞬間に向かって、「私」の期待と緊張は苦しいほど高まってい

く。それを、作者は歯医者へ行く気分には警えている。

「時はついに来た。みじめな絶望の時だ。いつもそうだ。その時を永遠に先延ばしにはできないのだ。歯医者に行くという、子どもの時の苦い経験で分かっているとおり、そこへ行く道中がいつまでも続くことはありえない。運命の入り口は確実に開く。心臓は最後の30分間で重く重く沈んでいって、ついには心臓があることすら疑問に思えてくるのだ。やがて、突然ドーンとこれまで夢想だにしなかった奈落に転落して消えてしまう。

さあ、もう一度言おう、時はついに来た。

卑しい職人のドアの前に立ち、どきどきと高鳴る胸を期待でふくらませていた。その時、ふと、私はもう一度あの奇妙な文字に目をやった。おお、何という変わりよう！何と恐ろしい！私は何をみているのか？熱っぽい空想に騙されたのか？おそるべき間隙がNとCの間で口を広げて欠伸をしている。一語ではなく、二語だったのだ。こうして、夢は覚めた。

看板のRomancementの文字の中でNとCの間にあったスペースを見落としていた、というのだ。職人が商っていたものは、ローマのセメントだった。

読者は、意外な結末に呆気にとられてしまう。それからこの悲劇の主人公を、さんざんに笑うことになる。作者は、最後を次のように締めくくっている。

「道の曲がり角で、振り返ってもう一度、悲しみと愛しみのまなざしをもって実体のない希望の幻影を見た。かつてはあれほどに慕わし

くかき抱いた空しき希望。「さらば！」と私はつぶやいた。それが結末であった。私は杖をつき、涙を拭った。翌日、ダンピィ・アンド・スパッグ社と取り引き関係を結んだ。ワインと酒類の卸業者である。看板は崩れかかった壁に当たって、まだ音を立てている、だがその音がこの耳に樂の音と聞こえることは二度とない——ああ！二度と。

悲劇の最後を、作者はエドガー・アラン・ポーの詩*The Raven* (1845年)の結末の一句、「二度と」Nevermoreを二度使用して、この短編を飾っている。

作者キャロルには、尊敬して止まない「おじ」がいた。母方のSkeffington Lutwidgeという人でロンドンのブロンプトンに住んでいた。学生時代にはロンドンへでると、よくこのおじを訪ねていた。独身で、精神病院の査察官 (Royal inspector of Insane Asylum) をやっていた人で、キャロルが行くと仕事の旅行で不在のことが時折あった。おじの最期は不幸にも、患者に頭を殴られて、それが原因で亡くなった。

作品中には、法案を議会に提出しようとした議員がInsane Asylumに送られたというくだりがある。

スケフィントン・ラトウィッジは、進取の気に富んだ人らしく、新式の器具、珍しいものを集めていた。若い甥のキャロルにとって彼は大変に魅力であったようだ。父方のおじのハッサードやクロフトの知り合いの所をたずねると、たくさんのお子もたちをはじめ、みんな相変わらずであり変わらない、ということが日記に出てくる。キャロル自身は、大学の中に身を置いて、日常の些事に煩わされず、先輩、同僚に恵まれ、広がる未来を前にしてこれからという1856年のことであるから、独身のスケフィントンおじの姿は、若き甥の目に格好よく映ったのにちがいな

い。父が保険に入ることを忠告したときに、「結婚は当分考えないし、したがって今から保険に入る必要もない」と、珍しく忠告を素直にきかなかったのも、或いはこの叔父の生き方への共感があったのであろう。キャロルのユーモアの短編『ロマンスメント』は、「わが尊敬するおじ」をいつまでもその中にとどめる作品となった。

注1) ドジスンが考えて、イエイツに新聞記者のようだからと退けられた最初の筆名は、エドガー・カスウェリスであった。詩人ポーと同じエドガーというファースト・ネームが彼の念頭にあったのではないだろうか。ポーの詩の中から‘Nevermore’というひとことがこの作品の最後を締めくくっている。

注2) Richard Flexmore Gaetter (1824-1860). パントマイムの舞台上で活躍。1824年9月15日、ロンドンのケニントンに生れ、8才で、ヴィクトリア劇場に出演、11才のときに、『月の中の男』で、滑稽なもの真似の影踊りを演じた。1844年以降、道化として活躍する。(英国のパントマイムは、善玉が悪玉を駆逐するのが定式で、舞台と観客が一体となって盛り上がる。子供向けの芝居であるが、連れてきた大人もまたそこに別の意味を理解して、二通りに楽しめる芝居になっている。パントマイムには、定番があり、現在でもキャロルの時代と同様に、『アラジンと魔法のランプ』『アリババと40人の盗賊』『シンデレラ』『ジャックと豆の木』などが上演されている。英国のパントマイムは默劇ではない。)

Bibliography :

Novelty and Romancement, Lewis Carroll, ed. Randolph Edgar, B. J.

Brimmer 1925

Lewis Carroll's Diaries vo. 1 - 4 ed. by Edward Wakeling 1993-97

The Dictionary of the National Biography

The Complete Works of Lewis Carroll Modern Library

The Letters of Lewis Carroll, ed. Morton N. Cohen Macmillan 1979